

## 平成 20 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	平成 2 0 年産 麦・大豆の生育経過の概要と特徴		
<p>[ 要約 ] 平成20年産小麦の10aあたり収量は199kg/10a、一等比率は86.1%と概ね良好であった。これは越冬後から全般に気象が良好に経過したこと、特に収穫期間の降雨が少なかったことが大きく影響した。またゆきちからの作付拡大と、生育状況や品種特性に応じた後期追肥の適切な実施が収穫量の増大と品質評価の向上に寄与した。</p> <p>大豆に関しては湿害回避技術導入面積が大幅に伸びた。登熟前半で長雨・低温等があったものの、平年並みの生育量を確保し、成熟も早まった。全般に大きな諸障害の発生もなく、10aあたり収量は131kg/10a、一等比率は46.5%と前年を上回った。</p>					
キーワード	小麦	大豆	作柄	技術部 作物研究室 県北農業研究所 作物研究室 環境部 病理昆虫研究室	

### 1 背景とねらい

県内における麦・大豆の生育・作柄等に関する調査・情報を取りまとめ、その概要や特徴を整理し今後の技術対応の資とするため取りまとめるものである。

### 2 成果の内容

#### (1) 小麦

ア 生育経過 9月の大雨により播種が遅れた地域も見られたが、小麦の生育量は概ね越冬前には平年並みを確保した。根雪期間は平年並みだったが積雪が少なく諸障害はほとんどなかった。越冬後は平年に比べ大幅に気温の高い状況が続き、生育ステージが早まった。

イ 収量・作柄 小麦の平均収量は199kgと、6年ぶりに200kg/10aに迫る水準となった。この要因として、収穫期の天候に恵まれ、品質を確保しながら収穫が行われたこと、ナンブコムギで縞萎縮病が発生したが、昨年と比べ追肥が積極的に行われ減収を抑えたこと、収量性の高いゆきちからの作付面積が大幅に増加したこと(256ha→523ha)、などが挙げられる。

ウ 品質 ランク区分は19年産より基準が変更されたものの、パン・中華麺用途では、ゆきちからの作付拡大により大幅に上位ランク・数量とも増大した。

#### (2) 大豆

ア 作付動向・生育経過 県南部を中心にリュウホウの作付けが急増した。播種時期は平年並みだったが、播種後の降雨が少なく出芽の揃いがやや劣った。開花は平年よりやや早まった。8月中下旬の長雨により登熟がやや停滞したものの、登熟後半は日照・気温とも平年を上回り、成熟が早まった。地下部の生育は平年より劣るものの、全般に地上部の生育量は平年並み～やや上回った。20年産については湿害回避技術の普及面積が前年の約3倍となる1200haを超え、全作付面積の約1/4を占めた。このため大豆の10aあたり収量は131kg/10a・平均収量対比は110と前年を大きく上回った。一等比率も46.5%と前年を上回った(2月17現在)。

### 3 成果活用上の留意事項

全县での活用を対象としているが、気象および生育経過等は作況試験を実施している北上・軽米の調査結果を基に作成している。よって一部地域や特定の品種では適合しない場合がある。

### 4 成果の活用方法等

#### (1) 適用地帯又は対象者等

県下全域の麦・大豆技術指導者、関係機関

#### (2) 期待する活用効果

現地指導における資料作成の資として活用

### 5 当該事項に係る試験研究課題

(890) 畑作物の生育相及び気象反応の解明 [ H14～H22、県単研究 ]

### 6 研究担当者

小綿寿志、伊藤信二、大清水保見

### 7 参考資料・文献

麦類・大豆作況試験報告、病虫害防除実績検討会資料、農作物統計他

# 8 試験成績の概要(具体的なデータ)

平成20年産 麦・大豆生育経過概要図

